有部の無明論について

田中教照

無明（avijjā）を含む煩悩論としては、三漏（tayo āsavā）、四暴流（cattāro oghā）、四軛（cattāro yogā）、七随眠（satta anusayā）などがすでに経典において現われている。アビダルマでも当然これらについて論じているが、例えば『集異門足論』や『品類足論』を見ると、「無明漏」や「無明暴流」「無明結」などを一致して「三界の無知」と理解している。このような解釈は後期の論書、『倶舎論』にも見出せる。「無明漏」を解釈して、「無明漏は三界の無明をいうのであって、十五事ある」[1]と述べている。これによって、有部では、無明を三界に及ぶ根本無知と理解していたことが知られるのである。

ところで有部には、有部特有な煩悩論として、「九十八随眠」つまり、十随眠を三界五部に配当して説く考え方がある。これも案外早い時期に成立していたのである。『法蘊足論』の沙門果品第四には、四沙門果と断煩悩との関係を説いて「無為の預流果とは、謂く三結永断し、及び彼の種類の結法を永断する、即ちこれ八十八の諸随眠を永断し、及び彼の種類の結法を永断するなり、これを無為の預流果と名づく」[2]とある。以下同様に無為の一来果とは、三結永断、即ち八十八随眠の永断と貪・瞋・癡の多分の永断である。不還果とは、五順下分結の永断と九十二随眠の永断である、と述べている。ここに、預流とは三結を永断した者という経典の解釈と、見惑八十八随眠を永断した者という有部特有の煩悩論からする解釈とが並記されていることは注目してよい。九十八随眠論は、見修無学の三道によって煩悩を断じていく修行道との関連においてみているのであり、見・修・無学の三道は「聖諦現観」を中心とする修行道であるから、煩悩もまた四聖諦との関連が問題とされて来ざるを得ない。ここに、煩悩を個別的性格の中でとらえようとする経典の煩悩論にかわって、煩悩を一括して四聖諦との対比の上でとらえようとする有部の九十八随眠論が成立する理由がある。

就中、『識身足論』以後の論書が無明を「相応無明」と「不共無明」とに分けようとすることは、煩悩の根本である無明

について、経典的煩悩論から修行道と相関する煩悩論を新たに展開しようとするものであるといえよう。以下、そのことについて述べる。『識身足論』[3]では、不共無明は五部に通じ、修所断煩悩としても数えられているが、その説明は何もない。『発智論』は、「諸の無明の、苦集滅道において不了なるを不共無明という」[4]と定義している。従って、四諦に関する無知が不共無明であると考えられる。然らば、『識身足論』の「修所断の不共無明」という言葉はどう解釈すべきか早速問題になる。なぜなら、有部の修行道論では、見道で四諦の無知をはなれ一果を証得するとなっているからである。『婆沙論』ではこの点を問題にし、三通りの解釈を与えている。[5]

問不共無明為二但見所断一為レ通二五部一耶。設爾何失。若唯見所断（ラバ）識身論説当三云何通一。（中略）答応レ作二是説一。如レ是無明唯見所断。（中略）彼文応レ作二是説一。彼是修所断随眠（ト）不二相応（セ）一無明相応心。不レ応二説言一彼是修所断不共無明相応心。

ここに説く第一説は、不共の字を相応せざるの意味に読みかえることによって結局見所断の無明と理解する。これに対し、第二説は、

有作是説。不共無明（ヘ）五部皆有。問若爾此本論文何故不説。答此中但説二見道所断不共無明一。以下此無明迷二四聖諦一不中与随眠相応起上故。修所断者雖レ非二随眠相応而起一而不レ迷レ諦是故不レ説。

と述べている。一応修所断の不共無明を認めながら、それは四諦に迷うものでないから『発智論』には説いていないのだと理解しているのである。

このような経緯からもわかるように、不共無明をとりわけて相応無明と区別する理由は四諦に迷う煩悩を第一の根本煩悩として位置づけるためであったと見ることができる。無明煩悩があらゆる煩悩の根本であることは、十二縁起からも当然のことであるが、それを四諦の無知と関係ずけつつ、すべての煩悩の生起の背景に四諦の無知が横わっていることを主張するところに、有部の不共無明についての考え方の特色を見て取ることができる。

この点を一層明らかにするのが『婆沙論』の三漏の解釈の箇所である。欲漏と有漏とで三界の煩悩は尽されているのに、なぜ無明漏を独立するのか、という疑問に答えて、上首と周普と遍行という三つの理由を挙げている。このうちでも、無明がすべての煩悩の上首だからであるとする説明が最も詳しく、主たる理由なのである。それは、無明を第一原因として十随眠が生起することを説明する。これは後に『雑心論』[6]や『倶舎論』[7]で、十随眠の生起の次第を説くとして、これだけ取り出して説明されている点からも重要である。[8]

上首者。謂無明覆故於四聖諦不楽不忍昏迷不了。（中略）由不楽故便生猶予。謂此是苦、為非苦耶、乃至是道、為非道耶。如是無明引生猶予。一切猶予能引決定。（中略）若遇邪説得邪決定。便

謂無苦乃至無道。如是猶予引生邪見。彼作是念、若無四諦決定有我及有我所。如是邪見引生身見。復作是念、此我我所為断為常。若見二所執相似相続一便謂為常。即是常見。若見二所執変壊不p続便謂為断即是断見。如是身見引生辺見。彼於三見随計一種能得清浄解脱出離、即是戒取。如是辺見引生戒取。復作是念、如是三見既得清浄解脱出離便為最勝即是見取。如是戒取引生見取。彼愛自見憎恚他見於自他見称量起慢(9)。

これによって十随眠の生起の次第は、無明→疑→邪見→身見→辺見→戒禁取見→見取見→貪→瞋→慢の順となるのである。必ずしもこの順にすべての十随眠が生起するわけではないと『倶舎論』は述べているが、ここに、四諦の無知が、すべての煩悩の根本にあること、そして、それが三界の煩悩に遍行すること、を示すために特に無明漏が建てられているのだ、と『婆沙論』は主張しているのである。

かくて、すべての煩悩に相応する煩悩である無明が、さらにすべての煩悩の発生の第一原因としても考えられる、それは四諦に対する無知を意味している、というのが、この有部の不共無明論である。このような不共無明は四諦現観を中心とした有部の修行道の観点からすれば、四諦の理に迷う見道所断の煩悩として取扱われることにもなるのである。断惑の四因を説く『倶舎論』の所論(10)は、この不共無明、すなわち四諦不了の四聖諦現観による捨断が、すべての煩悩の捨断と関連することを示している。

まず、第一因である「所縁の遍知」とは、四聖諦を遍く知ることによって断ぜられる煩悩のことをいう。それは見苦・集の自界縁、つまり九上縁を除く煩悩と、見滅・道の無漏縁の十八煩悩とのことである。第二因である「能縁の断」とは、能縁の惑を断ずることによって断ぜられる煩悩で、見苦・集の他界縁の惑であるこれは、見苦集の自界縁の煩悩に縁ぜられて起る煩悩であるから、自界縁の煩悩が所縁の遍知によって断ぜられれば、能縁がないのであるから断ぜられてしまうというわけである。第三の「所縁の断」とは、所縁を断ずるから、断ぜられる惑のことで、これは、見滅・道所断の有漏縁の惑のことである。この有漏縁の惑は、邪見・疑・無明という無漏縁の惑を所縁として起るから、この無漏縁の惑が所縁の遍知によって断ぜられた時には、有漏縁の惑も断ぜられるわけである。第四の因とは、「修惑の断」である。これは、対治道の生起によって断ぜられる惑のことである。

かくて、能縁断の惑と所縁断の惑とは、結局、所縁の遍知によって断ぜられるから、能縁断、所縁断という断惑の二因の設定は見所断の煩悩が四諦の遍知によってすべて断ぜられることを説明しようとしたものであるということができる。以上のことから、十随眠発生の根本原因である不共無明の断も四諦現観によって四諦の無知を破ることにあるのである

し、見惑八十八随眠の断も四諦現観によることがこれによって明らかである。見惑八十八随眠も、要するに四諦不了の不共無明を断ずることによつて断ぜられる随眠であることが知られる。筆者は、四諦不了の煩悩を不共無明として殊更にとり上げ、それを根本煩悩として、聖諦現観の修行道と対置するところに有部の煩悩論の特質を見る。『婆沙論』の、世尊が衆生のために説かれた「抜済法」は四聖諦である、という所論は、有部の世尊に対する評価を示すと同時に、有部思想を一貫する基本的考え方である。有部の煩悩論にもこの点は貫かれているのである。

然らば、不共無明を四諦の不了と定義するのは有部の創見かというと、そうではない。すでに『雑阿含』巻十二[11]に、十二因縁の中の無明を説明して、「無明とは若しは前際を知らず、後際を知らず、前後際を知らず」云々と、以下、内・外・内外、業・報、業報、仏・法・僧、苦・集・滅・道、因、因所起の法、善不善、有罪無罪、習不習、劣勝、染汚清浄、分別縁起、を皆悉く知らず、六触入処に於いて如実知見せず、彼々に於て不知不見無間等なし、癡無明大冥なることである、と説かれている。このような説明は初期アビダルマ論書、例えば『舎利弗阿毘曇論[12]』、『集異門足論[13]』『法蘊足論[14]』の癡不善根を解説する中にほぼ同じ形で現われているのだが、ここに苦・集・滅・道を知らないことも無明の説明として入つている。しかし、有部は修行道との関連から、「四聖諦」以外のものを捨てたのである。パーリ上座部の論書では「苦・集・滅・道、前辺・後辺、前後辺と相依性縁起法における無知を無明とする[15]」ことに定つている。ここには、「相依性縁起法」なるものが入つている点に特質をみるべきであろう。彼らは、不共無明と相応無明とを区別しないようである。

「欲貪結は無明結によって結にして結相応である。無明結は欲貪結によって結にして結相応である[16]」

という形で、九結と無明結との相応性を重視している。

かくて、阿含経典の無明論は、それぞれの部派の思想の特色によつて異つた解釈を生んでいることが知られる。パーリ上座部については改めて論ずることにする。

1 *Abhidharmakośa-bhāṣya* (P. pradhan, ed.) p. 306。2『法蘊足論』巻第三、大正二六、四六四下。3『識身足論』巻第四、大正二六、五四九上。4『発智論』巻第二、大正二六、九二五下。5『婆沙論』巻第三八、大正二七、一九七上—中。6『雑心論』巻第四、大正二八、九〇四上。7『倶舎論』巻第二十、大正二九、一〇七上—下。8『心論』は十随眠を必ずしも生起の次第によって説明しない。(大正二八、八一五下—八一六上。)これは『心論』が『婆沙論』と関連しない一の証拠である。9『婆沙論』巻第四七、大正二七、二四五下。10 A. kh. pp. 319-320。11 大正二、八五上。12 巻第六、大正二八、五七〇中。13 巻第三、大正二六、三七六中—下。14 巻第九、大正二六、四九四下。15 たとえば無明漏(avijjāsava)の説明 *Dhammasaṅgani*, p. 195。16 ibid. p. 200。